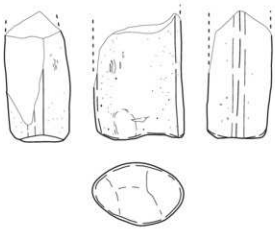
粕屋町文化財調査報告書第 54 集

阿恵古屋敷遺跡第 2 地点

福岡県糟屋郡粕屋町大字阿恵字古屋敷所在遺跡の調査



SK9 関連遺構出土　銅矛中子　原寸大

2021

粕屋町教育委員会

はじめに

本書は、共同住宅建築に伴い、令和元年度に粕屋町教育委員会が実施した粕屋町大字阿恵字古屋敷に所在する阿恵古屋敷遺跡第２地点の発掘調査の記録であります。

阿恵古屋敷遺跡は、古代糟屋郡の役所跡が見つかった国史跡阿恵官衙遺跡の西側 150 m付近に位置しており、今回の調査においても同時代の遺構が確認されています。また、弥生時代に青銅器生産が行われていたことを示す遺物も出土し、阿恵古屋敷遺跡が立地する微高地は古くから人々の営みが確認される地域であることも明らかになってきました。

本書が郷土の歴史に誇りを持ち、文化財に対する理解を深める上で広く活用されるとともに、研究資料としても貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、調査に御協力いただきました地権者様をはじめ、近隣住民の皆様に心から謝意を表します。

令和 3年3月 31 日
粕屋町教育委員会
教育長　西村　久朝

目　次

1　経過・位置と環境
1 調査に至る経過
1 調査体制
2 地理的環境
2 歴史的環境

4　調査成果
5 遺跡の概要
5 北調査区の調査
5 土坑
7 溝
8 井戸
10 南調査区の調査
10 竪穴建物
15 掘立柱建物
15 土坑
22 井戸
22 溝
23 包含層
24 ピット出土遺物
24 総括

25　図版

発行	粕屋町教育委員会
調査起因	共同住宅建築
現地調査	令和元年 10 月 1 日 ～ 令和元年 12 月 25 日
整理調査	令和２年４月１日 ～ 令和３年３月 31 日
使用方位	座標北(国土座標第Ⅱ系[世界測地系])。真北に対して 0°17′ 西偏。
遺構実測	西垣彰博、福島日出海
遺物実測	福島日出海、常盤拓生、上田津由美
製図	西垣彰博、毛利須寿代、上田津由美
遺物撮影	高橋幸作、西垣彰博
遺構撮影 / 執筆 / 編集	西垣彰博
資料整理	松永メイ子、毛利須寿代、上田津由美

本書に関わる遺物・記録類は、粕屋町立歴史資料館にて収蔵・管理し、公開する予定である。

須恵器の編年は以下を用いた。
『牛頸窯跡群』総括報告書 1　大野城市教育委員会 2008
『須恵器大成』田辺昭三 1981

経過・位置と環境

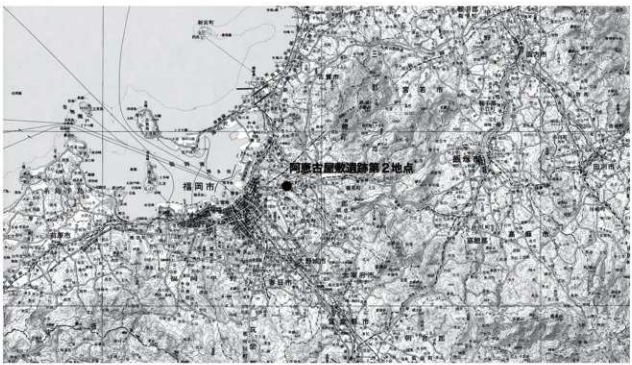


図１　阿恵古屋敷遺跡第２地点位置図（１/400,000）

調査に至る経過

阿恵古屋敷遺跡第２地点の調査は、福岡県糟屋郡粕屋町大字阿恵字古屋敷 296-1、297-1 において、令和元年６月 10 日に共同住宅建築工事に伴う埋蔵文化財事前審査願書が提出されたことに起因する。

当該計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である阿恵遺跡群に含まれているため、同年７月 31 日に確認調査を実施したところ、遺物包含層、土坑等の遺構を検出した。この調査結果に基づき協議を重ねたが、基礎工事による遺跡の破壊が免れないため、記録保存の発掘調査実施後に建築工事を着手することとなった。発掘調査箇所は２棟の住宅建築部分として、北調査区と南調査区の２箇所に分けて実施した。調査面積は 433㎡で、調査期間は令和元年 10 月１日～12 月 25 日である。報告書作成に係る遺物整理作業は、令和２年４月１日～令和３年３月 31 日で実施した。出土遺物および図面・写真等の記録類は粕屋町立歴史資料館にて保管している。

また、地域住民の方々をはじめ、地権者及び関係者の皆様には、調査の趣旨にご理解を得るとともに、多大なご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

調査体制

令和元年度

調査主体　粕屋町教育委員会
教育長　西村 久朝
社会教育課長　新宅 信久
同課文化財係主幹　西垣 彰博
同課同係主任主事　高橋 幸作
同課同係嘱託職員　福島日出海、朝原泰介
同課同係臨時職員　毛利須寿代、松永メイ子

令和２年度

調査主体　粕屋町教育委員会
教育長　西村久朝
社会教育課長　新宅信久
同課文化財係主幹　西垣彰博
同課同係主任主事　高橋幸作
同課同係会計年度任用職員
福島日出海、朝原泰介、毛利須寿代、松永メイ子、上田津由美

地理的環境

福岡県糟屋郡粕屋町は、福岡市の東に隣接し、粕屋平野の中央に位置している。町域は14.13km²と狭く、大半が平坦な地勢である。

粕屋平野の西は博多湾に面し、南側は四王寺丘陵部によって福岡平野と区分される。東側の三郡山地を源とする３本の河川が平野を貫流し、北から多々良川、須恵川、宇美川の順で博多湾へ注いでいる。平野の北側には立花丘陵部があり、博多湾に面して周りを山地で囲まれた小さな平野である。東の三郡山地から舌状に派生する低丘陵が多く、平坦な地勢の割に沖積地は河川流域に限られている。

阿恵古屋敷遺跡第２地点が位置する博多湾沿岸は、多々良川・須恵川・宇美川が河口付近で合流し、古代においては入江状の内海を形成していた。遺跡は、当時の推定海岸線から須恵川を約２km遡上した微高地上に立地する。

歴史的環境

本遺跡は、７世紀後半から８世紀の糟屋評（郡）衙に比定される国史跡阿恵官衙遺跡の西方約150ｍに位置する。政庁が造営されたのと同じ微高地上に位置しており、館、曹司、厨等の官衙関連施設が存在する可能性も考えられる場所である。

隣接地は過去に調査され、官衙関連遺構・遺物が存在することを確認している。阿恵天神森遺跡第１地点は８世紀代の廃棄土坑、８世紀末から９世紀前半の井戸などがあり、瓦の出土もみられる。阿恵天神森遺跡第２地点は転用硯、刀子、畿内系土師器などの官衙関連遺物が出土している。阿恵古屋敷遺跡第１地点は正方位の掘立柱建物が２棟あり、本遺跡の掘立柱建物と同じく阿恵遺跡５期（８世紀中頃～後半）の官衙建物である。

このように阿恵官衙遺跡と同じ微高地上に官衙関連遺構が広がっていることは間違いない。さらに、この微高地の西は須恵川まで続き、その付近を西海道駅路が通過しており、駅路と官衙を接続する取り付け道路がこの微高地に設置されていた可能性も考えられるような位置関係にある。また、微高地の南を流れる水路は須恵川につながっていて、古代においては須恵川から官衙に至る物資運搬用の運河としての機能を推測することもできよう。

また、本遺跡を駅路沿いに北上すると夷守駅家と推定される内橋坪見遺跡がある。大宰府式鬼瓦、赤色顔料が付着した隅切軒平瓦など多量の瓦が出土し、大型の建物群のほか、築地塀等の囲繞施設をともなっている。

このように阿恵古屋敷遺跡の周辺は官衙遺跡が密集する地域であると同時に、古代道路の陸上交通と須恵川の河川交通が結節する場所でもあり、官衙と古代交通を考える上でも注目される環境にある。

1. 阿恵古屋敷遺跡
2. 阿恵官衙遺跡（国史跡）
3. 阿恵天神森遺跡
4. 阿恵原口遺跡
5. 阿恵茶屋遺跡
6. 鶴見塚古墳
7. 多々良込田遺跡
8. 戸原鹿田遺跡
9. 内橋カラヤ遺跡
10. 内橋観遺跡
11. 内橋柚ノ木遺跡
12. 内橋坪見遺跡
13. 内橋牛切遺跡
14. 内橋登り上り遺跡
15. 長者の屋敷跡推定地
16. 原町平原遺跡
17. 戸原寺田遺跡
18. 戸原御堂の原遺跡

駅路推定線は、日野尚志「比恵・那珂遺跡群を中心にして諸問題を考える」『那珂38』福岡市教育委員会2005を参考とした。

0　1km

図２　阿恵古屋敷遺跡周辺の遺跡分布図（1/25,000）

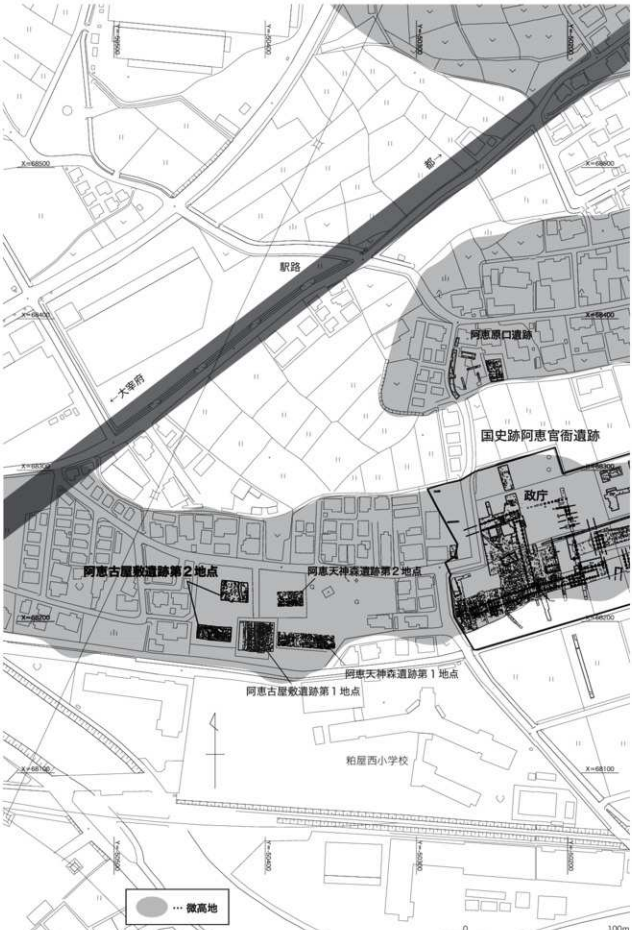


図３　阿恵古屋敷遺跡第２地点周辺図(1/2,500)

調査成果

調査地は、糟屋評（郡）衙に比定される国史跡阿恵官衙遺跡の政庁跡から西方 150 mの地点に位置する。同一の微高地上に立地し、今回の調査においても官衙建物１棟を検出した。

図４　阿恵古屋敷遺跡第２地点周辺図（1/500）

遺跡の概要

調査地は、糟屋評（郡）衙に比定される国史跡阿恵官衙遺跡の政庁跡から西方 150 m の地点に位置する。阿恵官衙遺跡は７世紀後半から８世紀にかけて造営された政庁、正倉など官衙遺構の全体像を把握することができる。

本遺跡においても、８世紀後半の官衙建物を１棟検出し、阿恵官衙遺跡から続く官衙遺構の広がりを確認することができた。また、弥生時代後期の青銅器生産関連遺物の発見にも至った。

今回の調査は共同住宅の建築に伴うもので、発掘調査対象は２棟の建物の建築範囲に限っている。そのため、調査区を北調査区と南調査区に分けて実施した。それぞれの調査区ごとに報告する。

北調査区の調査（図5）

微高地の背の部分に近く、遺構を検出した地山面は後世の削平をやや受けていた。南調査区や周辺遺跡に比べて遺構密度が薄いのは、削平による影響があると推定する。

土坑

SK1（図6）

調査区の南西隅に位置し、長方形を呈する土壙墓とみられる。長軸2.25 m、短軸 1.07 m、深さ 0.29 mを測る。

SK１出土遺物（図７）

１、２は龍泉窯系青磁椀で、内面に花文を施す。３は同安窯系青磁椀で、高台径 5.5㎝。４は瓦質の火鉢か。軟質で灰色を呈し、外面は体部が縦方向のナデ、口縁部は横方向のナデ。５は陶器の底部。内面ヘラケズリで、外面はヘラケズリ後ナデ。底径 14.0㎝。６～８はカマドの焚口か。同一個体の可能性もある。内外面ナデで、いずれもわずかに内湾する。８は外面に荒いハケかタタキの跡がみられる。９は炉壁片。中央部に壁面の平坦な部分がわずかに残る。胎土は明赤褐色で内部にスサを含む。陶磁器から 12 世紀中頃～後半とみられる。

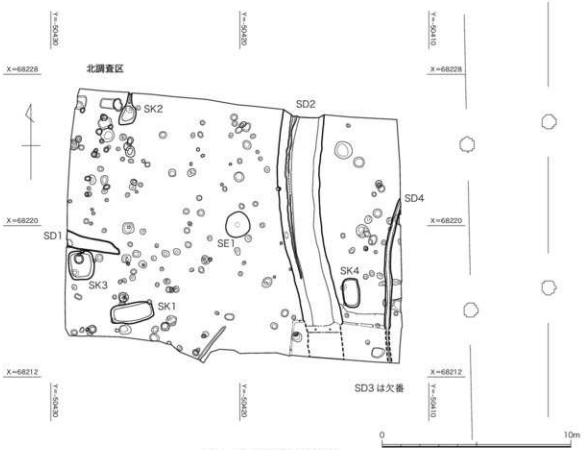
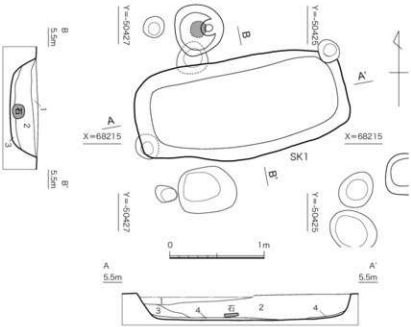


図５　北調査区平面図(1/200)



1. 褐灰色土（10YR4/1）
2. にぶい黄褐色土（10YR5/1）に褐灰色土（10YR5/1）とにぶい黄褐色土（5YR4/4）が斑状に混ざる
3. 褐灰色土（7.5YR4/1）
4. 暗灰色粘質土（N3/1）

図6　SK1 平面図・断面図（1/40）

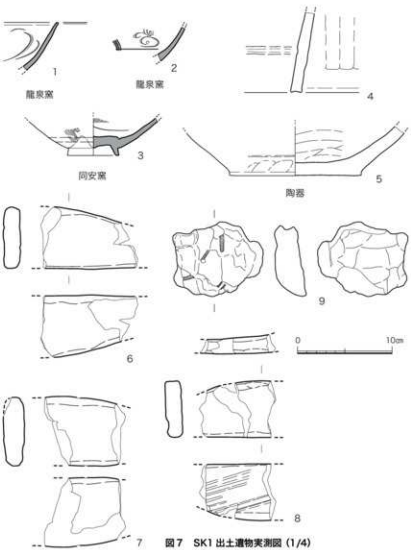


図7　SK1 出土遺物実測図（1/4）

SK2（図8）

調査区の北西に位置し、楕円形の堀方の北側に溝状の掘り込みが伸びる。楕円部は長軸 1.14 m、短軸 0.79 m、深さ 0.18 m、溝部は幅 14㎝、長さ 56㎝以上を測る。

SK2 出土遺物（図9）

1は須恵器の高杯で、4 方透かしをもつ。TK208 並行。底径 9.2㎝。**2**、**3**は土師器の高杯。**3**は底径 17.1㎝。**4**は土師器の鉢で口径 10.6㎝。体部の外面はヘラミガキで、内面はヘラケズリ。**5**、**6**は土師器の手捏ね土器。指オサエが残る。**6**は口径 2.6㎝、器高 1.9㎝。**7**は土鍋で口縁部に押圧文を施す。体部内外面はナデ。古墳時代の遺物も混ざるが、**7**を時期比定の根拠に平安～鎌倉期に位置付ける。

SK3（図10）

調査区の南西隅に位置する方形の土坑である。長軸 1.53 m、短軸 1.35 m、深さ 0.24 mを測る。覆土は灰黄褐色砂（10YR6/2）である。この灰黄褐色砂で埋まった遺構が南北の調査区に渡って一定数存在する。出土遺物から平安末～中世にかけてのものである。

SK3 出土遺物（図11）

1は白磁椀。**2**は瓦質土器の蓋である。欠損している中央部に擦みが付くとみられる。

SK4（図12）

調査区の南東側に位置し、SD2

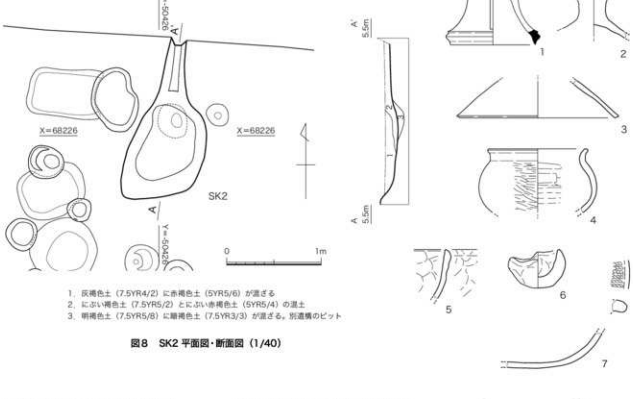


図8　SK2 平面図・断面図（1/40）

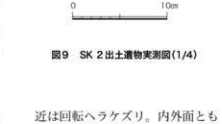


図9　SK 2出土遺物実測図(1/4)

に隣接する長方形の土坑である。長軸 1.56 m、短軸 0.89 mを測り、深さは11cmしかなく残りが悪い。

図化し得る出土遺物はないが、SK3 の項で述べた灰黄褐色砂は認められないので、中世に下ることはないと思われる。

溝（SD3 は欠番）

SD1（図 10）

調査区の南西に位置し、SK3 に隣接する。幅 0.74 m、長さ 2.9 m以上を測る。深さは 8 cm程度しか残っていない。覆土は灰黄褐色砂である。

SD1 出土遺物（図 11）

3、4ともに龍泉窯系青磁椀。

SD2（図 13）

調査区の東側に位置する南北方向の溝で、直線ではなくやや湾曲する。幅は上端で 2.2 m、下端で 1.2 m、深さは 0.6 mを測る。

土層断面図で観察できるように、土層 1（灰色土）と土層 2（灰色粘質土）は溝を掘り直したものである。出土遺物から中世の所産である。

微高地の背の付近に位置するためか、溝底は北端と南端で差がなくほぼ平坦である。溝を南に延伸すると、阿恵古屋敷遺跡第 1 地点西端の未調査箇所にあたると思われる。

SD2 出土遺物（図 14）

1は龍泉窯系青磁椀。2は天目台。器壁は非常に薄く基部でも 3 ㎜しかない。波を打って湾曲する。釉は明るい灰色で、胎土は白色を呈する。3は李朝白磁椀。高台は高くわずかに外湾する。見込みは段を有し、見込み内面は平坦面がなく、砂目が残る。外面の底部付近は回転ヘラケズリ。内外面ともに施釉され、釉は灰白色で浅黄橙色の斑点が点在する。胎土は灰白色。高台径 6.4㎝。4は龍泉窯系青磁椀。高台径 6.5㎝。5は土師器杯で、体部中位で屈曲する。口径 11.6㎝、器高 3.2㎝、底径 5.6㎝。底部は回転糸切り。6は楽浪系瓦質土器の鉢。口縁部は直口し、やや肥厚する。体部から底部にかけて緩やかな曲線を描く。内外面ともヨコナデで、底部は静止糸切り。色調は外面が灰色で、内面は灰白色を呈し、胎土はきめ細かく精良である。口径 10.8㎝、器高 5.1㎝、底径 6.8㎝。7は土師質の湯釜。外面に煤が付着する。内面はヨコハケで、外面は袈裟襷状にハケメを施す。突帯付近はナデ。8は砂岩製の茶臼。

SD4（図 13）

調査区の東端に位置する。幅 0.3 m、長さ 8.5 m以上、深さ 0.22 mと細く、北側で少し東に向きをかえる。この溝を南側に延伸しても、阿恵古屋敷遺跡第 1 地点には一連の溝とみられるものはない。出土遺物より中世の所産。

SD4 出土遺物（図 15）

1 は龍泉窯系青磁椀。口縁部の沈線のみで体部は無文。口径 12.7㎝、器高 5.1㎝、高台径 4.6㎝。2 は白磁椀で、高台径 4.6㎝。見込みに沈線状の段。3 は陶器のすり鉢。内外面ともヨコナデで、色調は赤褐色。

井戸

SE1（図 16）

調査区のほぼ中央に位置する。直径 1.24 m～1.38 mの円形で、深さは約 2.9 mである。深さがあるため安全面を考慮し、途中から人力による掘り下げ作業を断念してバックホウによる掘削に切り替えた。そのため詳細な土層観察は行えていない。井戸の底からは木杭が出土している。出土遺物から弥生時代後期の所産である。

SE1 出土遺物（図 17）

1 から 23 は弥生土器。1 は複合口縁壺で、内面ヨコハケ、外面は不明。2、3 は壺の胴部。内外面ともタテハケ。4～6 は底部。4 はややレンズ状の底部で、5 は凸レンズ状を呈する。7 は瀬戸内系の甕で、肥厚させた口縁端部に凹線文を施す。内面ヨコハケ、外面タテハケ。口径 17.2㎝。8～14 は甕の口縁部から頸部の破片。8 は口縁端部を跳ね上げ状に突出させ、頸部に三角突帯を施す。12 は端部に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、段が付く。15 は高杯

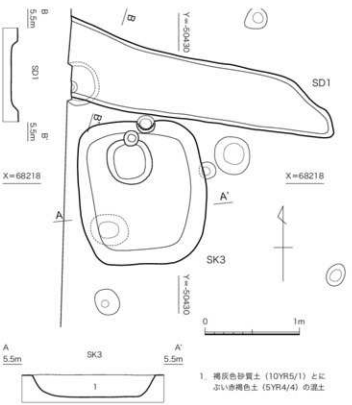


図 10　SK3、SD1 平面図・断面図（1/40）

図 11　SK3、SD1 出土遺物実測図（1/4）

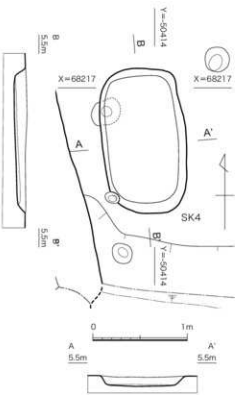


図 12　SK4 平面図・断面図（1/40）

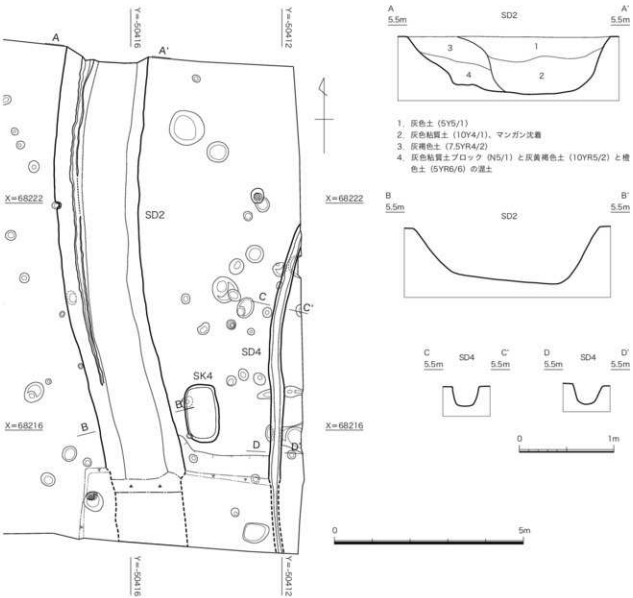


図13　SD2、4　平面図(1/100)・断面図(1/40)

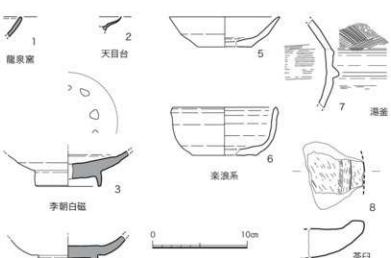


図14　SD2 出土遺物実測図 (1/4)

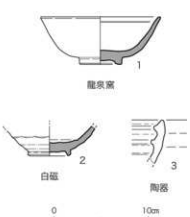


図15　SD4 出土遺物実測図 (1/4)

の脚部で、体部との境に沈線が回る。孔は4孔で、脚はラッパ状に開く。外面は縦方向のヘラミガキを施す。16～18は器台。16は口縁部で、内面荒いヨコハケ、外面荒いタテハケ。17と18は脚部で内面ヨコハケ、外面タテハケ。19と20は鉢。20は内面ナデ、外面の底部付近がヘラケズリで体部はタテハケ。21と22は手捏ねの鉢で内外面に指オサエが残る。23は匙形土製品。内外面ともナデ。匙部の幅8.8㎝、深さ5.8㎝、柄部の径2.7㎝。胎土はにぶい橙色で砂粒を多く含む。焼成良好である。24と25は鉄塊で、暗オリーブ灰色を呈する。24は長さ3.2㎝、25は2.3㎝。

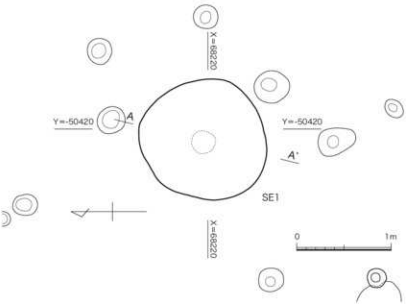
ピット出土遺物（図18）

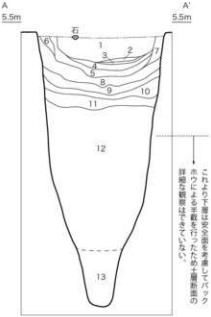
北調査区のピットで出土した主な遺物をここで報告する。

1と2は複合口縁壺。1は口縁部外面に櫛描波状文を施す。頸部は内外面とも斜め方向のハケ。口径20.2㎝。2は頸部に三角突帯を貼り付け刺突を施す。頸部内面ヨコハケ、外面タテハケ。口径19.6㎝。3と4は甕で内外面ともタテハケ。3は口径18.8㎝。5は器台で口縁部に刺突を施す。脚部の内外面はタテハケで、底部内面に指オサエが残る。口径14.1㎝、器高18.0㎝、底径23.5㎝。6は杏形器台。

南調査区の調査（図19）

南調査区は微高地の南緩斜面上にあり、調査区から約13ｍ南に水路が流れていて微高地の裾に近い立地である。北調査区に比べて削平の度合いが少なく、遺構面の上に包含層が堆積していた。包含層除去後の遺構面は、周辺の調査遺跡と同じく遺構密度が高い。弥生時代後期、古墳時代中期、古代～中世の遺構・遺物を検出した。注目すべきは、弥生時代後期の銅矛の中子と、阿恵遺跡５期（８世紀中頃～後半）に対応する官衙建物があげられる。





1. 黒褐色土（7.5YR3/2）
2. 明褐色土（7.5YR5/6）に褐色土（7.5YR4/4）が混ざる
3. 黒褐色粘質土（5YR3/1）
4. にぶい赤褐色土（5YR4/4）
5. 黄褐色土ブロック（10YR5/6）と褐色土（7.5YR4/3）が混ざる
6. 暗褐色粘質土（5YR3/2）に暗褐色土ブロック（5YR3/6）と灰色土（N4/1）と小礫が混ざる
7. 黒褐色粘質土（7.5YR3/2）に暗褐色土ブロック（5YR3/6）と灰色土（N4/1）と小礫が混ざる
8. にぶい赤褐色粘質土（5YR4/4）に灰色土（N4/1）が少し混ざる
9. 黒褐色粘質土（10YR2/2）に赤褐色土（5YR4/6）が混ざる
10. 褐灰色粘質土（7.5YR4/1）に赤褐色土（5YR4/6）が混ざる
11. 明黄褐色土（10YR6/6）に褐灰色土（10YR4/1）が少量混ざる
12. 灰黄褐色微砂（10YR4/2）に明黄褐色土ブロック（10YR6/6）と炭化物が混ざる
13. 灰色粘質土（N4/1）、木杭出土

図16　SE1平面図・断面図（1/40）

竪穴建物

SC1（図20）

調査区の南西に位置し、堀方の平面形状が方形になる竪穴建物の隅を検出したのみで全体像は不明である。深さも6㎝しか残っていない。出土遺物から8世紀代とみられる。

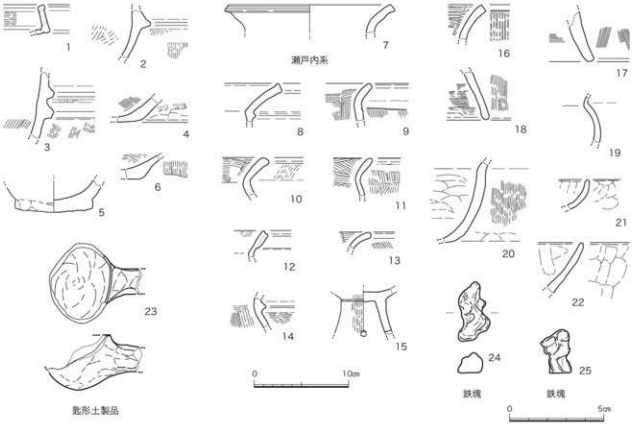


図 17　SE1 出土遺物実測図（1/4［土器］、1/2［鉄滓］）

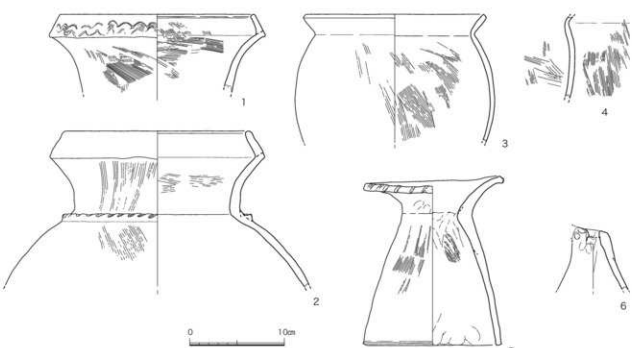


図 18　北調査区ピット出土遺物実測図（1/4）

図19　南調査区平面図（1/200）

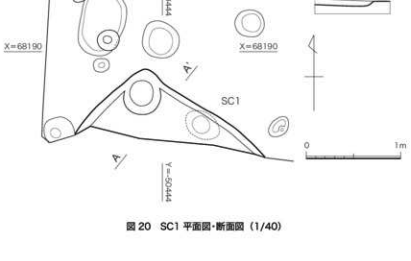


図20　SC1 平面図・断面図（1/40）

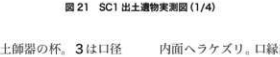


図21　SC1 出土遺物実測図（1/4）

SC1 出土遺物（図 21）

1は須恵器の杯身。2は土師器の皿で、底部はヘラ切り。

SC2（図 22）

調査区の北端に位置し、SC3に切られる。方形に廻る壁際溝を検出した。確認できる範囲で東西幅 4.6 m、南北幅 1.9 mである。壁際溝は幅 30㎝前後、深さ 10㎝程度。この壁際溝から滑石製臼玉とガラス玉が出土している。

SC2 出土遺物（図 22）

1は須恵器の杯蓋。口縁部で屈曲し、端部は外方向につまみ出す。薄手のつくりで短頸壺の小型の蓋か。2は高杯の杯部か。これらは牛頸編年Ⅲ A ～Ⅲ B 期とみられるものの、SC2 を切る SC3 がそれ以前の TK47 並行であることから（後述）、混入の可能性を考えるべきであろうか。

3～7は土師器の杯。3は口径 13.3㎝、器高 6.1㎝、外面はヘラミガキ。4は内面を荒いヨコハケ。口径 8.2㎝。5は内湾する体部から口縁部が屈曲して直口する。6と7は口縁部が外反する。8と9は甕。8は口縁部が緩く外反し、体部は下膨れする。外面タテハケ、内面ヘラケズリ。口縁部 14.0㎝。9は長胴化傾向。外面タテハケ、口縁部内面は短い単位のヨコハケ、体部内面はナデ。口径 16㎝。にぶい褐色を呈する。10は石戈の双孔付近の剥片。11と12は滑石製臼玉。11は径 5 ㎜、厚 3 ㎜、孔径 2 ㎜。12は径 5 ～ 6 ㎜、

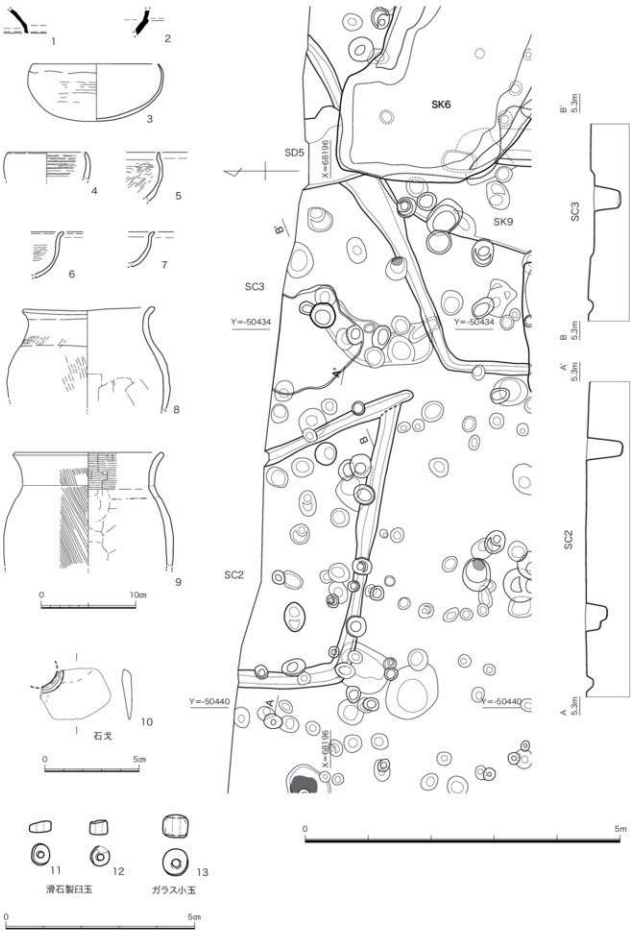


図 22　SC2、SC3　平面図・断面図（1/60）、SC2 出土遺物実測図（1/4［土器］、1/2［石器］、1/1［玉類］）

厚4㎜、孔径2㎜。13はガラス小玉でコバルトブルーの発色。径7㎜、厚6㎜、孔径2.5㎜。

SC3（図22）

SC2を切り、SK5・SK6・SD5に切られる。方形の壁際溝は南隅で傾斜に沿って南へ下る。確認できる範囲で東西幅6m、南北幅3.3m。出土遺物からTK47並行とみられる。

SC3出土遺物（図23）

1は須恵器の杯蓋。端部に段を持つ。2は須恵器杯身で、口縁部の立ち上がりが高く、受け部は端部を鋭く仕上げる。口径10.6㎝、受部径13.0㎝、器高5.0㎝。3と4は土師器の甕の口縁部。5はSC3に切られるピットから出土した土師器の杯。口縁部は短く外反し、内外面ヘラミガキで外面の下半はヘラケズリ。口径12.9㎝、器高6.2㎝。

SC4（図25）

調査区の南端に位置する。方形の縦穴建物で、SK6・SK11に切られる。調査区際に位置し、調査区の内外で比高差があることから、法面崩壊の危険性を考慮して覆土の掘り下げはほとんど行っていない。これはSK11も同様である。

SC4出土遺物（図24）

わずかに遺構覆土を掘り下げた際に出土した遺物ですべて土師器である。5世紀後半とみられる。1と2は杯で内外面とも黒褐色に焼成し、ヘラミガキを施す。1は口径13.6㎝、器高5.9㎝。焼成不良で軟質。2は口径14.4㎝、器高7.8㎝。焼成良好。3は甕の

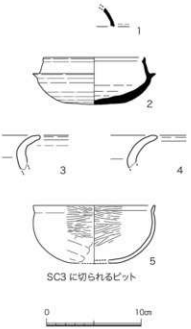


図23　SC3出土遺物実測図（1/4）

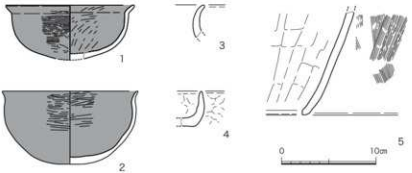


図24　SC4出土遺物実測図（1/4）

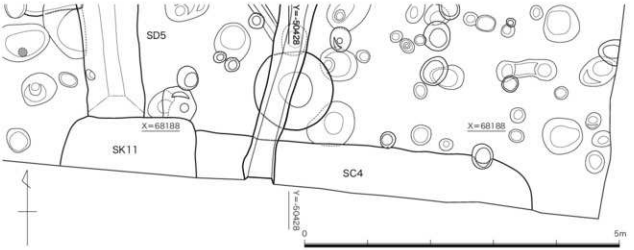
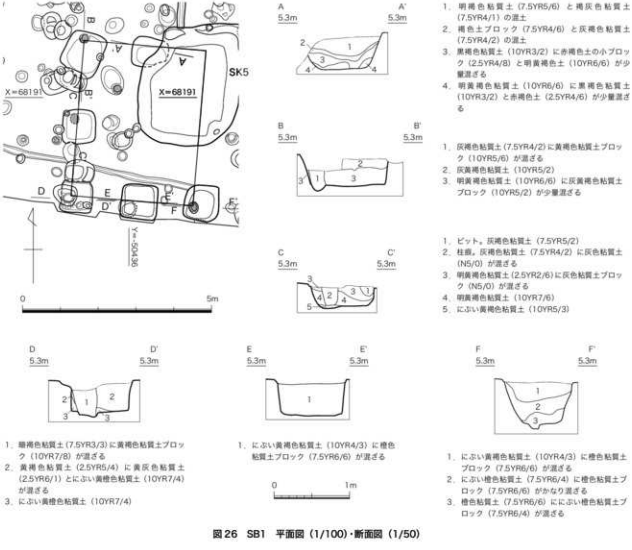


図25　SC4　平面図（1/60）



1. 明褐色粘質土（7.5YR5/6）と褐灰色粘質土（7.5YR4/1）の混土
2. 褐色土ブロック（7.5YR4/6）と灰褐色粘質土（7.5YR4/2）の混土
3. 黒褐色粘質土（10YR3/2）に赤褐色土の小ブロック（2.5YR4/8）と明黄褐色土（10YR6/6）が少量混ざる
4. 明黄褐色粘質土（10YR6/6）に黒褐色粘質土（10YR3/2）と赤褐色土（2.5YR4/6）が少量混ざる

1. 灰褐色粘質土（7.5YR4/2）に赤褐色粘質土ブロック（10YR5/6）が混ざる
2. 灰黄褐色粘質土（10YR5/2）
3. 明黄褐色粘質土（10YR6/6）に灰黄褐色粘質土ブロック（10YR5/2）が少量混ざる

1. ピット。灰褐色粘質土（7.5YR5/2）
2. 柱痕。灰褐色粘質土（7.5YR4/2）に灰色粘質土（N5/0）が混ざる
3. 明黄褐色粘質土（2.5YR2/6）に灰色粘質土ブロック（N5/0）が混ざる
4. 明黄褐色粘質土（10YR7/6）
5. にぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）

1. 暗褐色粘質土（7.5YR3/3）に黄褐色粘質土ブロック（10YR7/8）が混ざる
2. 黄褐色粘質土（2.5YR5/4）に黄灰色粘質土（2.5YR6/1）とにぶい黄橙色粘質土（10YR7/4）が混ざる
3. にぶい黄橙色粘質土（10YR7/4）

1. にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）に橙色粘質土ブロック（7.5YR6/6）が混ざる

1. にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）に橙色粘質土ブロック（7.5YR6/6）が混ざる
2. にぶい橙色粘質土（7.5YR6/4）に橙色粘質土ブロック（7.5YR6/6）がかなり混ざる
3. 橙色粘質土（7.5YR6/6）ににぶい橙色粘質土ブロック（7.5YR6/4）が混ざる

図26　SB1　平面図（1/100）・断面図（1/50）

口縁部。**4**は手捏ね土器で内外面に指オサエ痕が残る。器高3.8cm。**5**は甑で、内面ヘラケズリ、外面タテハケ。

掘立柱建物

SB1（図26）

調査区南端に位置し、SK5に切られる。梁行2間（3.23 m）、桁行2間（4.12 m）の南北棟の側柱建物で、建物主軸方位はN−5°−E、建物面積は13.3㎡を測る。柱掘方の平面形状は方形で、長軸0.9～1.2 m、短軸0.8～1.0 m、柱のアタリは径0.25 m。

柱掘方の形状と規模から官衙建物に間違いない。建物主軸方位は、阿恵遺跡5期（8世紀中頃～後半）の正倉群と同じであり、建築時期も出土遺物からみて矛盾しない。

SB1出土遺物（図27）

1は須恵器の杯身。**2**は平瓶の口縁部。口径4.2cm。**3**と**4**は口縁部を短く外反させる土師器の杯。**4**は黒褐色に焼成し、内外面をヘラミガキ。**1**～**4**は5世紀後半～6世紀代の遺物であり、掘立柱建物を建築する際に柱掘方の掘削によって破壊された遺構に伴う遺物である。**5**と**6**は8世紀代の杯身の口縁部。**6**は柱堀方を切るピット出土。

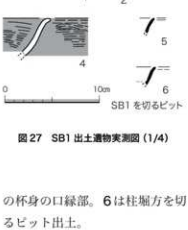


図27　SB1出土遺物実測図（1/4）

土坑

遺構番号は北調査区からの通し

番号である。

SK5（図 28）

調査区の中央に位置し、SB1を切る方形の土坑で、南北幅 3.17 m、東西幅 2.65 m、深さ 0.54 mを測る。出土遺物から 14 世紀代とみられる。

SK5 出土遺物（図 29）

1 と **2** は土師器皿で底部は回転糸切り。**1** は口径 6.0㎝、器高 1.1㎝、底径 5.0㎝。**2** は口径 6.7㎝、器高 1.0㎝、底径 5.3㎝。**3** は土師器の杯で底部は回転糸切り。**4** は白磁の口ハゲの皿。**5** は瓦質の摺鉢。口径 26.6㎝。青黒色を呈する。焼成良好。**6** は枢府磁の椀。高台は厚く、内側を斜行するように削り出す。見込みの文様は、唐草文、花文を施すが施釉のため鮮明ではない。釉は高台の下までかかり、高台端部の釉は丁寧に掻き取る。釉の貫入は内面が細かく、外面は大きい。釉の色調は乳灰色で、胎土はやや黄色味を帯びた灰白色で精良。高台径 4.7㎝。底部厚 1.3㎝。**7** は取鍋の注ぎ口。手捏ねによる調整で、内面は指オサエ痕がよく残る。周辺の弥生時代後期の遺構に起因するもの。

SK6（図 30）

SK5 の東側に位置し、SK9、SD5 を切る。平面形は楕円状で、南側の低位方向に向かって浅い溝が掘られている。南北幅 2.74 m、東西幅 4.51 m、深さ 0.46 m を測る。底はほぼ平坦である。溝部分は幅 0.4 ～ 0.9 m、深さは 12 ㎝程度。出土遺物の時期幅が大きいが、李朝陶器の 15 ～ 16 世紀を下限とする。

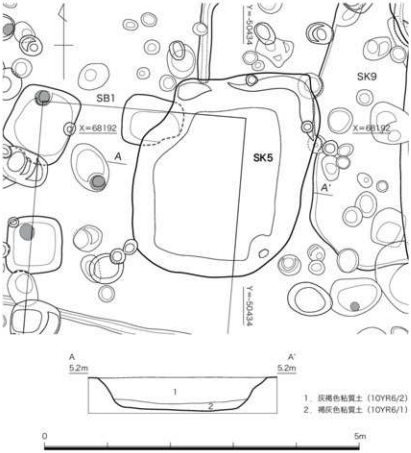


図 28　SK5　平面図・断面図（1/60）

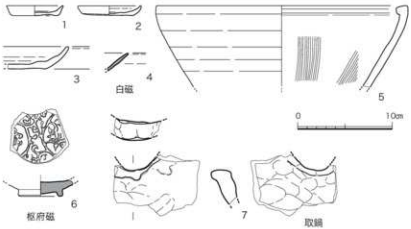


図 29　SK5 出土遺物実測図（1/4）

SK6 出土遺物（図 31）

1 ～ **3** は須恵器の杯蓋。**1** は転用硯で内外面に墨の跡が残る。**2** は天井部の境と口縁部に段を持つ。TK23 ～ 47 並行か。**3** は器高が高く、天井部の境と口縁部に沈線状の段をもつ。天井部内面には当て具痕がある。牛頸編年Ⅲ A 期。**4** と **5** は須恵器の杯身。**4** は口縁部の立ち上がりが低く、牛頸編年Ⅳ B ～ Ⅴ 期か。**5** は底部ヘラ切り未調整。口径 10.2㎝、器高 3.4㎝。牛頸編年Ⅴ 期。**6** はハ

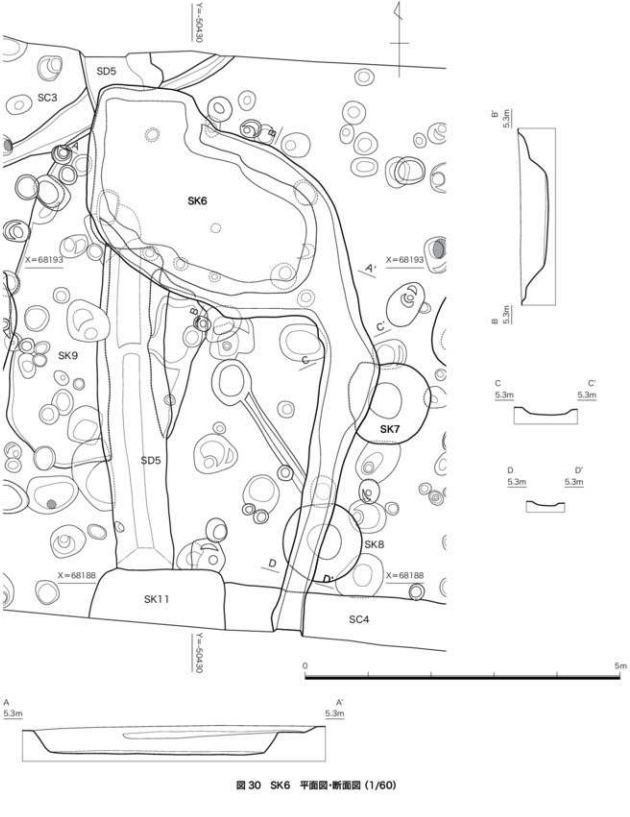


図 30　SK6　平面図・断面図（1/60）

ソウの頸部で櫛描波状文を施す。頸部径 6.4 ㎝。TK208 前後か。**7** は土師器の杯。摩滅のため調整不明。口径 18.6㎝。7 世紀後半。**8** は中世の土師質の鉢で、内面が細いヨコハケ、外面は荒いタテハケ。**9** は龍泉窯系青磁椀。**10** と **11** は李朝陶器。**10** は外面が褐色釉、内面はオリーブ灰の自然釉。**11** は壺の高台付近で、粉青沙器か。全体に白泥を塗って、畀線を数段に渡って施す。15 ～ 16 世紀。**12** は立岩産とみられる輝緑凝灰岩製の磨製石包丁。刃部に横位の擦痕がある。

SK7（図 32）

SK6 の溝部分に切られる円形の土坑である。径 1.2 ～ 1.3 m を測、深さ 0.71 m を測る。

SK7 出土遺物（図 33）

1は須恵器杯蓋。8 世紀前半。

SK8（図 34）

SK7 の南側に位置し、SK6 の溝部分に切られる円形の土坑である。径 1.2 m、深さ 0.75 m を測る。出土遺物から 10 世紀代とみられる。

SK8 出土遺物（図 35）

1～4は土師器杯。1は口縁部が外反し、体部に段状の稜線が付く。口径 12.8㎝。2は底部ヘラ切り。3は高台径 6.4㎝。4は高台径 7.0㎝。5は滑石製の石鍋。

SK9（図 36）

調査区の中央に位置し、SK6、SD5 に切られる楕円状の土坑である。出土遺物から弥生時代後期の所産。銅矛の中子が出土しており、青銅器生産が行われていたことを示す資料である。

SK9 関連出土遺物（図 37）

SK9 を切るピットの出土遺物を図 37 に掲載している。調査の際はピット群と SK9 の覆土の区別がしがたく、弥生後期の遺物は SK9 に伴う可能性がある。

1は銅矛の中子。真土製で、断面は楕円形。きめ細かなシルト状の微粒子で細かい石英粒を含む。表面は浅黄色で内面は黄灰色を呈する。残高 3.5㎝、幅 2.4㎝、厚さ 1.6㎝を測る。2は弥生土器の鉢で外面はタテハケ。口径 21.0㎝、器高 10.9㎝、底径 6.8㎝。3は弥生土器の壺で底部はレンズ底。外面はナデで、内面はハケ。胴部最大径 19.2㎝。4は弥生土器の器台。口径 7.2㎝。5は赤焼土器で外面にタタキ痕と内面に当て具痕が残る。

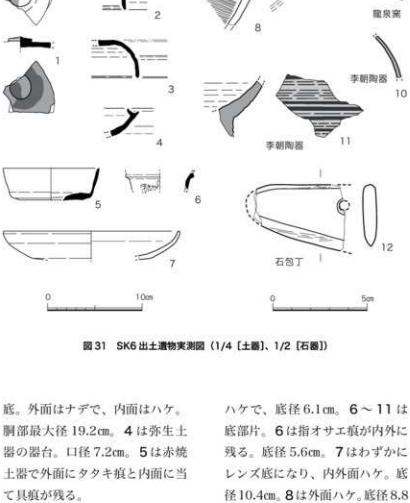
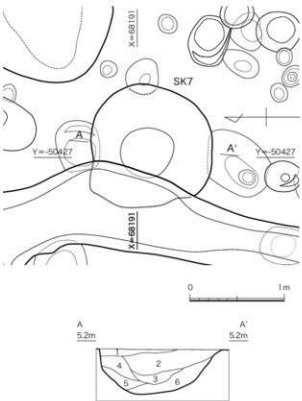


図 31　SK6 出土遺物実測図（1/4［土器］、1/2［石器］）

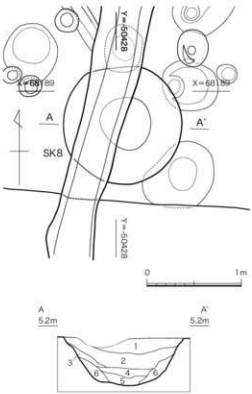
SK9 出土遺物（図 39）

いずれも弥生時代後期に位置付けられる。1は複合口縁壺で、頸部に三角突帯を貼り付け、口縁部は丸くおさめる。外面はタテハケで頸部内面に指オサエ痕が残る。口径 20.0㎝。2～5は甕。2は外面タテハケ、口径 22.8㎝、胴部最大径 28.0㎝。3は口径 34.2㎝。4は胴部径が口径よりも小さく細身である。口縁端部はわずかにつまみ上げる。底部は厚手でややレンズ底になる。外面はタテハケで底部付近はヘラケズリ。内面は縦方向のナデ。体部下半は2次焼成を受け、口縁部付近にススが付着する。口径 15.4㎝、器高 20.0㎝、底径 3.7㎝。5は内外面ハケで、底径 6.1㎝。6～11は底部片。6は指オサエ痕が内外に残る。底径 5.6㎝。7はわずかにレンズ底になり、内外面ハケ。底径 10.4㎝。8は外面ハケ。底径 8.8㎝。9は壺の底部で、外面タテハケ、内面ナデ。底径 5.0㎝。10は平底で、外面タテハケ。底径 7.0㎝。11は外面タテハケ、内面は工具痕が残る。底径 7.5㎝。12は手捏ね土器。指オサエ痕が残る。13と14は三韓系土器。13は無文土器系の鉢か。口縁部は粘土紐を貼り付け、短く外反する。頸部は段を成して凹線状にくぼむ。肩は張らずに下方へ続く。全体に器壁は厚い。底部は平底で、ヘラ状工具による丁寧なナデで平坦に仕上げる。外面はタテハケで、底部付近はヘラケズリ。内面はタテハケの後ナデ。色調はにぶい橙色で、胎土は 3㎜前後の石英粒を多く含む。口径 10.3㎝、器高 11.1㎝、底径 6.8㎝。14は平底で、外面はヘラケズリ後ナデ。内面は



1．褐色土（7.5YR4/4）に明褐色土ブロック（7.5YR5/6）が混ざる
2．暗赤褐色土(5YR3/6)と黒褐色土(7.5YR3/1)の混土に橙色土ブロック(7.5YR5/6)を含む
3．黒褐色土（7.5YR4/1）
4．褐灰色土（7.5YR4/1）に明褐色土（7.5YR5/6）を粒状に含む
5．褐灰色土（7.5YR4/1）
6．黒褐色粘質土（7.5YR2/2）

図 32　SK7　平面図・断面図（1/40）



1．褐灰色土（10YR4/1）に明褐色土ブロック（7.5YR5/6）が混ざる
2．黒褐色粘質土（7.5YR3/1）に明赤褐色土ブロック（5YR5/6）が混ざる
3．黒褐色粘質土（7.5YR3/1）
4．黒褐色粘質土（7.5YR2/1）
5．黒褐色粘質土（7.5YR2/2）に明赤褐色土ブロック（5YR5/6）が混ざる
6．暗赤褐色粘質土（2.5YR3/4）

図 34　SK8　平面図・断面図（1/40）

図 33　SK7 出土遺物実測図（1/4）

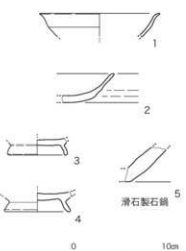


図 35　SK8 出土遺物実測図（1/4）

ナデ。内外面ともに指オサエ痕が残る。色調はにぶい黄橙色で、胎土は石英粒を含む。焼成不良で軟質。**15**～**17** は器台。**15** は頂部に孔をもつ。外面は荒いタテハケで内面はナデ。口縁部は粘土紐の接合痕が消え残る。口径 5.7㎝。**16** は口径 11.0㎝。**17** は直線的に開く脚部。外面は荒いタテハケ後ナデ、内面は荒いヨコハケ。底径 16.8㎝。**18** は頁岩製の砥石。全長 16.0㎝、幅 6.3㎝、厚さ 4.0㎝。

SK10（図 40）

調査区の東端に位置する方形の土坑で SE2 に切られる。南北幅 2.35 m、東西幅は確認できる範囲で 2.38 m、深さ 0.56 m を測る。図示し得る出土遺物はないが、他の遺構の覆土と比較して中世と考えられる。

SK11（図 36）

調査区の南端に位置する方形の

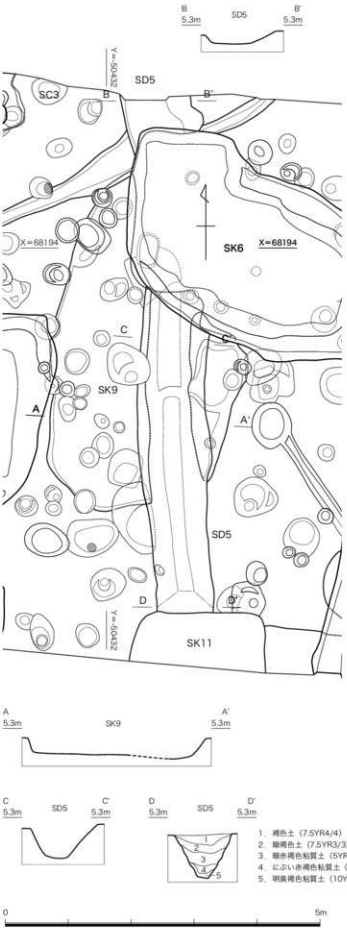


図36　SK9、SK11、SD5　平面図・断面図(1/60)

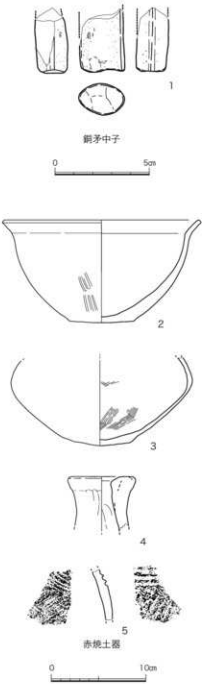


図37　SK9 関連出土遺物実測図
(1/2【中子】、1/4【土器】)

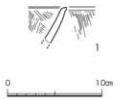


図38　SK11出土遺物実測図(1/4)

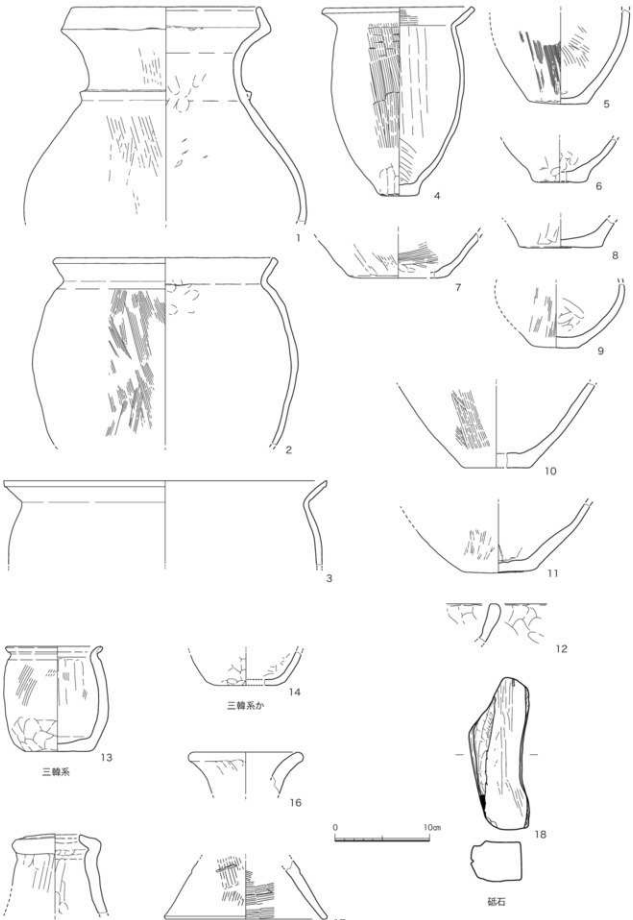


図39　SK9 出土遺物実測図（1/4）

土坑で、SC4、SD5を切る。調査区境の比高差を考慮して覆土の掘り下げは行っていない。観察できる範囲で東西幅2.14 m、南北幅0.92 mを測る。覆土は灰色微砂で中世とみられる。

SK11 出土遺物（図38）

1は検出面出土の土師器の鉢で内外面ハケメ。

井戸

SE2（図40）

調査区の東に位置し、SK10を切る円形の井戸である。直径1.6～17 m。約90㎝掘り下げた時点で湧水が始まり、堀方が崩壊する危険性もあったことから、それ以上の掘り下げは断念した。覆土は灰黄褐色砂質土（10YR6/2）で、図示し得る出土遺物はないものの、中世の所産と考えられる。

溝

SD5（図36）

調査区の中央をほぼ南北方向に

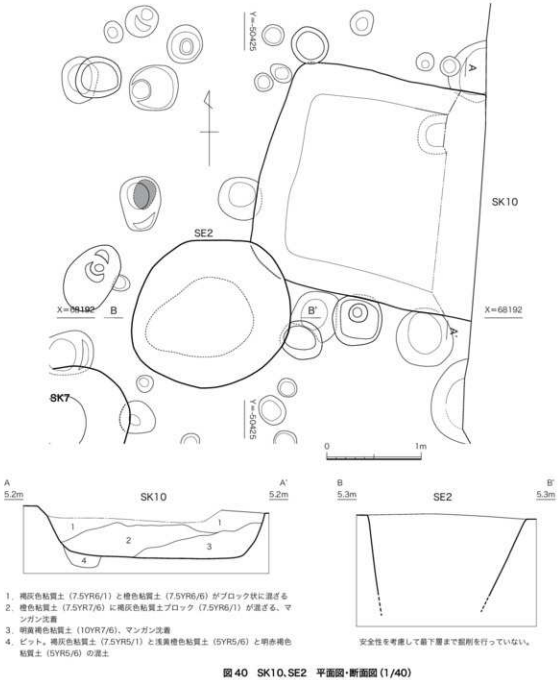


図40　SK10, SE2　平面図・断面図（1/40）

伸びる溝で、北から南に向かって流れる。SC3、SK9を切り、SK6、SK11に切られる。幅は0.9～1.1 m、長さは8.2 m以上、深さは北端が22㎝、南端が60㎝。地形が南に傾斜していて、溝底の標高差は南側が66㎝低い。

SD5出土遺物（図41）

1～4は須恵器の蓋杯。1は天井部と体部の境に段をもち、口縁端部はわずかに段の痕跡が残る。口径13.2㎝、器高4.2㎝。牛頸編年Ⅲ A 期～Ⅲ B 期。2は天井部外面にヘラ記号がある。口縁部が外反し、口径11.4㎝、器高3.4㎝。牛頸編年Ⅳ B 期。3は口縁部に綾が残る。口径11.8㎝、器高4.8㎝。牛頸編年Ⅲ A 期。4は口縁部を丸くおさめる。口径11.9㎝、器高4.1㎝。牛頸編年Ⅲ B 期。5と6は須恵器の甕の口縁部片。7は須恵器の提瓶か平瓶。底部はナデで、体部との境は手持ちヘラケズリ、体部はカキメ。底径10.0㎝。8は土師器の杯。内外面ともヘラミガキ。口径10.7㎝。9は土師器の短脚の高杯。底径9.3㎝。10は坩堝か取鍋。段状の口縁を呈する。外面は2次被熱で赤味を帯びる。11は支脚。上端の径7.8㎝、下端の径9.2㎝、器高7.9㎝、孔径2.0㎝。

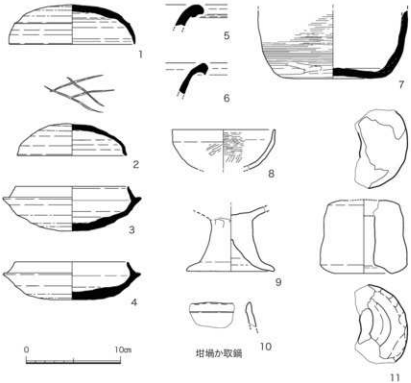


図41　SD5出土遺物実測図（1/4）

包含層

包含層出土遺物（図42）

削平度合いの少ない南調査区に遺物包含層が残っていたので出土遺物を報告する。

1～5は須恵器。1は杯蓋で、

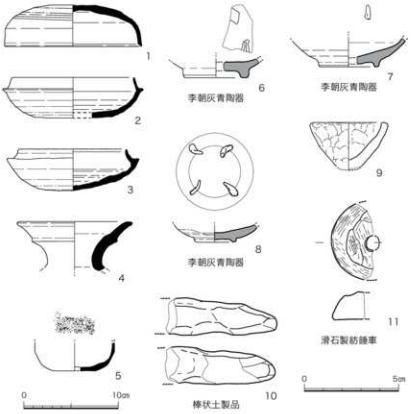


図42　包含層出土遺物実測図（1/4［土器］、1/2［土製品・石製品］）

口縁部に段が残る。口径 14.3cm、器高 4.4cm。牛頸編年Ⅲ A 期。**2** と **3** は杯身でいずれも天井部内面に当て具痕が残る。牛頸編年Ⅲ A 期。**2** は口径 12.8cm、受部径 15.0cm、器高 4.3cm。**3** は口縁部にわずかに段が残る。口径 11.4cm、受部径 14.0cm、器高 4.4cm。**4** はハソウの口縁部。器壁は厚い。口縁端部や口縁下の突端部は丸味をもって鋭さに欠ける。口径 12.2cm。**5** は杯で、内面にヘラ記号をもつ。内外面ヨコナデ。底径 4.2cm。**6**～**8** は李朝灰青陶器。**6** と **7** は椀で、内外面とも施釉し、見込みに砂目をもつ。**6** は色調オリーブ黄色、胎土は明オリーブ灰色。高台径 6.8cm。**7** は色調が緑色を帯びた灰白色、胎土は明オリーブ灰色。高台径 6.4cm。**8** は皿で、底部外面は施釉しない。見込みに砂目をもつ。色調はオリーブ灰色、胎土は灰白色。高台径 4.2cm。**9** は手捏ね土器。口径 8.3cm、器高 5 cm前後。**10** は棒状土製品または匙形土製品の柄の部分。幅 2.0cm、厚さ 1.8cm、残長 5.8cm。**11** は滑石製紡錘車。残長 4.0cm、厚さ 1.8cm、孔径 0.7cm。

ピット出土遺物（図 43）

ピット出土遺物をまとめて報告する。

1 は移動式カマドの右側面か。色調は外面が橙色、内面がにぶい黄橙色。**2**～**5** は炉壁片でスサとを含む。**2** は全長 5.8cm、幅 3.9cm、厚さ 3.6cm。**3** は全長 5.1cm、幅 5.0cm、厚さ 3.3cm。**4** は全長 5.0cm、幅 4.9cm、厚さ 3.2cm。**5** は全長 5.8cm、幅 4.2cm、厚さ 3.8cm。

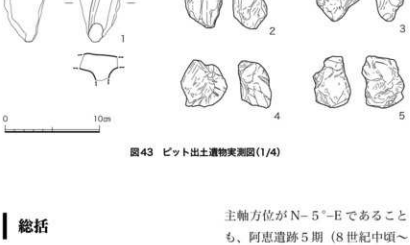


図 43　ピット出土遺物実測図（1/4）

総括

今回の調査で特筆すべきは、弥生時代後期の青銅器生産遺物が出土したことと奈良時代の官衙建物を検出したことが挙げられる。

青銅器生産遺物は、SK9 に重複するピットから出土した銅矛の中子で、出土遺物から弥生時代後期に位置付けられる。粕屋平野を流れる多々良川流域では、土井遺跡群（福岡市）、多々良大牟田遺跡群（福岡市）で青銅器の鋳型が出土していて、青銅器生産が行われていたことが知られている。本遺跡周辺でも、銅鏃が戸原鹿田遺跡[1]、青銅製鋤先が内橋坪見遺跡[2]と内橋登り上り遺跡[3]で出土していて、これらの遺跡も弥生時代後期である。多々良川流域だけではなく、須恵川流域においても弥生時代後期を中心として青銅器生産が行われていたことを裏付ける資料の発見に至った。

また、8 世紀中頃～後半にかけてとみられる掘立柱建物を 1 棟検出した。平面形が方形の柱掘方をもち、1 辺が 0.8 ～ 1.2 m、柱のアタリが径 0.25 m を計測する。このような柱堀方の形状と規模は官衙建物とみて間違いなく、国史跡阿恵官衙遺跡で確認されている官衙建物と同じ特徴である。建物主軸方位が N－5°－E であることも、阿恵遺跡 5 期（8 世紀中頃～後半）の官衙建物と同じである[4]。

8 世紀中頃～後半は、阿恵官衙遺跡の政庁は既に他所に移転しているもの（移転先不明）、正倉群は引き続き同じ場所で管理されていたことが分かっている。正倉群の管理を行う何らかの官衙施設が設置されていたと考えられ、今回の調査で発見した掘立柱建物もそのような役割を担っていた建物群のうちの一つと位置付けることができる。

最後に、15 世紀～ 16 世紀の李朝灰青陶器がまとまって出土したことも注目される。当時の調査地は阿恵村に属し、中世資料より阿恵村は 14 世紀～ 15 世期にかけて成立したと推測されている[5]。筥崎宮の荘園だった可能性があり、博多に近い地理的要因などから、農村部でも比較的入手しやすい環境にあったとみられる。

(1)『戸原鹿田遺跡』粕屋町教育委員会 1991
(2)『内橋坪見遺跡 1 次・2 次』粕屋町教育委員会 2019
(3)『内橋登り上り遺跡』粕屋町教育委員会 1994
(4)『阿恵遺跡』粕屋町教育委員会 2018
(5)『粕屋町誌』粕屋町 1992

阿恵古屋敷遺跡第2地点　北調査区全景（北東から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　SK1 完掘状況（北東から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　SK2 完掘状況（南東から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　SK3 完掘状況（東から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　SD2 完掘状況（北から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　SD4 完掘状況（北から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　SE1 土層断面状況（東から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　SC1 完掘状況（北東から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　南調査区全景（北東から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　南調査区西側全景（北東から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　SC2 完掘状況（南から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　SC3 完掘状況（南西から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　SB1 検出状況（西から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　SK6 完掘状況（北から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　SK7 完掘状況（西から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　SK9 完掘状況（北から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　SK10 完掘状況（西から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　SE2 掘り下げ状況（北から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　SD5 完掘状況（北から）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　須恵器杯蓋［包含層］（図 42-1）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　土師器杯［SC2］（図 22-3）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　須恵器杯蓋［SD5］（図 41-2）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　三韓系土器［SK9］（図 39-13）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　須恵器杯身［SC3］（図 23-2）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　須恵器杯身［SD5］（図 41-4）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　弥生土器甕［SK9］（図 39-4）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　石戈［SC2］（図 22-10）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　銅矛中子［ピット］（図 37-1）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　弥生土器手捏ね鉢［SE1］（図 17-21）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　滑石製紡錘車［包含層］（図 42-11）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　弥生土器匙形土製品［SE1］（図 17-23）

阿恵古屋敷遺跡第2地点　石皿［SE1］（未掲載）

報告書抄録

ふりがな	あえふるやしきいせきだい２ちてん
書名	阿恵古屋敷遺跡第２地点
シリーズ名	粕屋町文化財調査報告書
シリーズ番号	第54集
編著者名	西垣彰博
編集機関	粕屋町教育委員会
所在地	〒811-2314　福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目１番１号
発行年月日	2021年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
阿恵古屋敷遺跡 第２地点	福岡県糟屋郡粕屋町 大字阿恵字古屋敷296-1、297-1	403491	280078-4	33°36'50"	130°27'24"	2019.10.1 ～ 2019.12.25	433㎡	共同住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
阿恵古屋敷遺跡 第２地点	集落	弥生～中世	竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝	弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、石器、剣形中子	青銅器生産遺物として剣形中子が出土。

要約

遺跡は、糟屋評（郡）衙に比定される国史跡阿恵官衙遺跡から西約150ｍの同一微高地上（標高約5ｍ）に立地する。過去の遺跡周辺調査では、弥生時代～中世の遺構が検出されている。今回の調査においても、同時代の遺構を確認した。竪穴建物４軒、掘立柱建物１棟、土坑11基、井戸２基、溝５条である。このうち掘立柱建物は８世紀中頃～後半に位置付けられるもので、阿恵官衙遺跡の官衙建物と同じ特徴をもち、官衙関連施設が本遺跡付近にも展開していることが確認できた。また、弥生時代後半の剣形中子が出土している。多々良川流域の土井遺跡群、多々良大牟田遺跡群では青銅器鋳型が出土しており、本遺跡周辺の集落においても青銅器生産が行われていたことを示すものとして注目される。

阿恵古屋敷遺跡第２地点　粕屋町文化財調査報告書第54集

令和3年3月31日　発行

発行　粕屋町教育委員会

〒811-2314　福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目１番１号（粕屋町立歴史資料館）

印刷・製本　株式会社九州カスタム印刷

〒812-0007　福岡県福岡市博多区東比恵3-16-15

阿恵古屋敷遺跡第２地点

粕屋町文化財調査報告書第54集

２０２１

粕屋町教育委員会